

# 黒を着て重ねし齡鳥雲に

藤田湘子

湘子は黒を好み、また実に黒の似合う人であった。何事によらず一流好みであった湘子は、黒の発色や素材に凝っていたであろうことは想像に難くない。

湘子は昭和五十八年立春から三年間、毎日「一日十句」を作句、主宰誌の「鷹」誌上に、もれなく発表するという多作の修練を自らに課し、その成果を句集『一個』『去来の花』『黒』の三部作として上梓した。『黒』の後記には、「題名『黒』には、格別の意味はない」と書かれているが、渾身の荒行の満行に、最も好きな色を持って自祝の意を表したのではないだろうか、と私は思っている。「黒はわが今生の色秋の風」「去来の花」に所収されている句である。

1984年(S39作) 第十一句集『去来の花』 鑑賞・野本京